

10月21日  
報告

## 強制連行中国人被爆者の遺族の平和公園訪問

金子 哲夫

いつも原水禁世界大会のフィールドワークでお世話になる川原洋子さんからの強い要請で、于瑞雪さんの遺族二人の平和公園訪問に同行し、案内をすることになりました。

10月21日午前9時に原爆慰霊碑前で合流し、原爆慰霊碑への献花からスタートしました。

ここでは、原爆慰霊碑に収められている死没者名簿について、少しだけ紹介しました。川原さんに聞いたところ、強制連行された中国人被爆者のうち、于瑞雪さんなど生き残った人の名前は掲載されていませんが、被爆死した5人の中国人の名前は掲載されているとのことでした。

その後、原爆資料館に移動し資料館の見学です。移動中に、森滝市郎先生が、平和公園を案内されるとき、「祈りの泉」を「世界には、トレビの泉など有名な泉がありますが、この泉は水を求めて死んでいった被爆者を慰めるための特別の泉です」と紹介されていたことを思いだし、この話とともに多くの被爆者が水を求めて死んでいったことを話しました。

原爆資料館入り口付近には、そんなに多くの方が並んでいませんので、意外に入館者が少ないなと思ったのですが・・・。

エスカレーターで移動する前、平和監視時計を示し、二人のお父さんが被爆されてから28931日が経ったことをまず紹介し、原爆資料館3階に進みました。

3階では、導入展示ともいえる広島市の地形模型に映像を投影する「焦土と化した広島」で、二人が知りたいと思われた于瑞雪さんの被爆場所である広島刑務所の位置を示します。爆心地からの距離を見ながら、何度も確認するようにみておられたのが印象的でした。

私が別れた後の話になりますが、その日の午後、二人は川原さんに案内されて広島刑務所を訪れられました。

本館の展示場に移動します。一気に入館者が多くなり、進むのもままならない状況です。全てを紹介することはできません。

亡くなった子どもたちの遺品の前では、①原爆で亡くなった人たちの内、12歳、13歳の子どもが一番多かったこと ②この展示を見て、一人ひとりの顔を思い浮かべて欲しいことなどを話しました。被爆、特に熱線による被害提示では、当時の日常生活で使われていた陶磁器の食器やガラス瓶などを紹介し、爆心地直下の地表温度は3000度から4000度にも達したことに触れました。特に食器類を紹介したのは、あの日も当たり前の日常生活があり、市民が犠牲になったことを知って欲しかったからです。

十分な時間をとることは出来ませんでした。原爆被害の実相の一部に触れていただいたと思います。

本館を出て東館に移動する途中にあるギャラリーで少し時間をとりました。

それは、ここに展示されている中島地区の復元図は、大学の先生、大学生、マスコミなど市民の協力によって復元できたことを知って欲しかったからです。さらにこの平和公園には、当時6つの町があり4000人を超える人たちの暮らしがあったが、一瞬のうちに全ての人々のいのちが奪われてしまった場所であることなどを話しました。

平和公園内でどうしても伝えたい場所がありましたので、駆け足のような資料館見学になりました。

いよいよ平和公園の案内です。たくさんの慰霊碑などがありますが、私が案内したのは、慈仙寺跡、韓国人原爆犠牲者慰霊碑、供養塔がある場所でしたので、平和公園北側に移動しました。

最初に案内したのが慈仙寺跡です。

この地面が、この平和公園の中で唯一被爆当時の地面を残していることを説明した後、石灯籠の下に挟まった小石を示しながら、当時の爆風のすごさを話しました。被爆当時のままの状態です。

知ることのできる貴重な場所です。

すぐ隣の韓国人原爆犠牲者追悼碑に頭を垂れます。原爆慰霊碑に参拝してからずいぶん時間が経ちましたし、この碑については、きちんと説明したいことがありますので、すぐそばのベンチに座って話すことにしました。



「1910年、日本が朝鮮の植民地支配を開始し、土地調査事業などによって、土地を奪われた朝鮮人たちは、農民として自活できない状況に追い込まれ、日本への移住を余儀なくされたこと、そして1944年から始まった徴用は、中国人強制連行と同じように強制によって日本国内で働かされ、広島、長崎で被爆しなければならなかったこと」などを話しました。

熱心に聞いてくれました。後になるのですが、広島テレビの取材の場面で、韓国人被爆者のことを話されたようですから、印象に残ったと思われます。

次は、供養塔の説明です。いまも約7万の遺骨が納められていること、8月6日に多くの遺族がここにお参りすることを紹介しました。そして私が最も伝えなかったことですが、強制連行された中国人で、広島地裁検事局（三川町）か広島西署（現在の県民文化センター）に留置中に原爆に遭い被爆死した人は5名の遺骨が、1950年代後半にこの供養塔に納められた遺骨の中から5体分が、遺骨送還されたが、まだこの供養塔の中に眠ったままの遺骨があることと思われることです。そういう思いで、供養塔にはぜひお参りして欲しかったのです。

そして、最後に私にとって大事な話をしました。それは、第1回原水禁世界大会に参加した中国代表団

が、被爆者救援のために5万元（720万円）のカンパを寄せてくれたことです。そのカンパが当時の被爆者にとって、どれだけ大切なものだったか、そしてその後の日本政府を動かす力になったことを話しました。「民衆の連帯が大切ですね」との答えが返ってきました。

ここで平和公園めぐりは終わり、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館（以下「追悼祈念館」）に移動しました。

追悼祈念館を訪れた一番の目的は、于瑞雪さんの遺影を登録することでした。登録の手続きをする前にすでに遺影が登録されている呂学文さんの遺影をみるため、追悼空間へのスロープを下りました。ここには、この追悼祈念館の建設時に被爆者がこだわり設置した6枚のパネルがあります。特に説明したのは、3枚目と6枚目です。3枚目は「中国出身者も含まれており、その中には半強制的に徴用された人々もいました。」の文言です。私の説明を聞いた後、中国語の翻訳文を確認するように熱心に読んでおられたのが印象的でした。6枚目は「誤った国策」の部分です。この2枚はどうしても説明しておきたかったパネルです。

この後、遺影コーナーに行き、呂学文さんの遺影を検索。中国語の説明文をしっかりと読んで、お父さんの遺影が登録されたらどうなるかを確認。

体験閲覧室に行き、いよいよ中国人被爆者于瑞雪さんの遺影登録申請です。

川原さんたちが事前に相談されていたのでしょう、書類を提出すると2、3点確認があっただけで登録の手続きは終了しました。「父の写真はあまりないので」と話しながら写真を渡されたのが印象に残っています。

その日のうちに、登録が完了するということで、明朝もう一度ここを訪れ、確認するとのことでした。

平和公園での予定は、これで終了です。

この後、二人は広島刑務所に移動されましたが、私はここで別れました。

中国人の平和公園案内は初めての体験でしたが、私にとってよい勉強となりました。